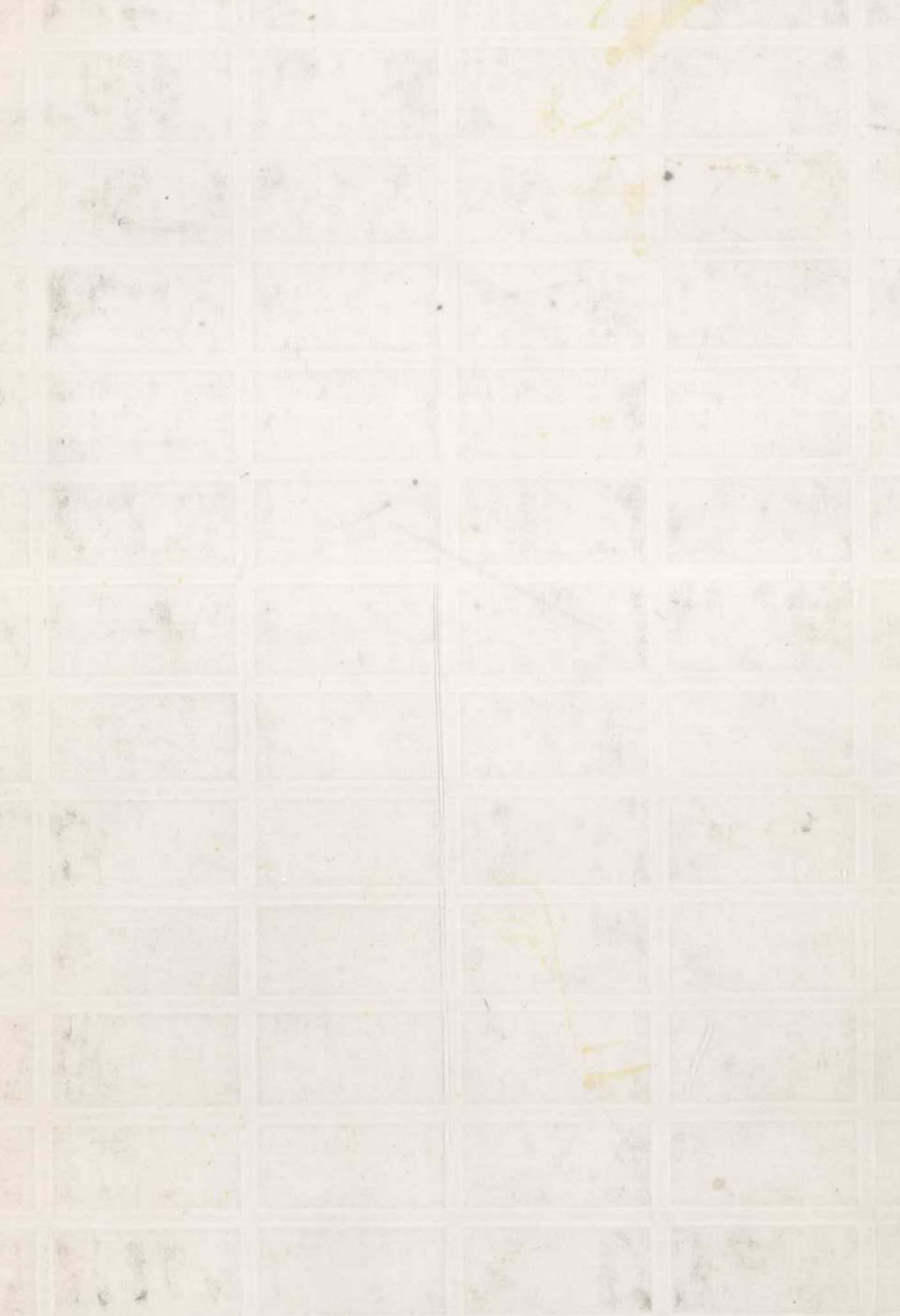




伊藤整日本

近代劇運動の發足

15

講談社

日本文壇史 XV

◎ 伊藤貞子 一九七二

昭和四十七年四月八日 第一刷發行
昭和四十八年五月二十四日 第二刷發行

定價八二〇圓

著者 伊藤 整

發行者 野間 省一
東京都文京區音羽二一二・一二二

印刷者 長澤 良一
長野市西和田四七〇

印刷所 信毎書籍印刷株式會社
長野市西和田四七〇

(黒柳製本)

發行所 株式會社 講談社
東京都文京區音羽二一二・一二二

振替口座 東京三九三〇
電話 (945) 一一一一 (大代表)
郵便番號 一一二

落丁本・亂丁本はお取りかえいたします。

Printed in Japan

0391-135755-2253 (0) (女1)

讀者に

瀬沼茂樹

参考文献

索引

装帧構成岡本芳雄

寫眞

* 横瀬夜雨 「花守日記」 女子文壇社と河井醉茗 伊良子清白

「女子文壇」と同誌掲載の菊池りう子「いやな家」、山田くに子「あがなひ」、横瀬夜雨選「新體詩」のページ

* 泉鏡花 齋藤野の人 「新小説」掲載の「歌行燈」 登張竹風

幸徳秋水と菅野須賀子 荒畑寒村 界利彦 宮下太吉 森近運平

* 小山内薫と二代目左團次 岡田三郎助、八千代 森鷗外譯「ジョン・ガブリエル・ボルクマン」自由劇場公演「ジョン・ガブリエル・ボルクマン」の舞臺

坪内逍遙 島村抱月 文藝協會公演「ハムレット」の舞臺

* 夏目漱石と中村是公 森田草平 小宮豊隆

高濱虚子と河東碧梧桐 坂本四方太 「ホトトギス」 「鶏頭」

* 島崎藤村 「春」 藤村と親族たち（明治十四年、秀雄、廣助、友彌、高瀬薫他） 藤村の親族たち（明治四十一年、冬子、楠男、鶏頭、ひさ子、こま子他）

岩野泡鳴 遠藤清子 「文章世界」掲載の「悲痛の哲理」（泡鳴）

目次

第一章

明治四十二年、古矢つぎの——伊良子清白——女性の崇拜者たちと
夜雨——河井醉茗、小島烏水と夜雨——依田芳枝が夜雨と別れる

第二章

山田邦子と横瀬夜雨の交渉——邦子と夜雨の同棲——邦子が夜雨の
もとを去る——夜雨の孤獨

完

第三章

病床の齋藤野の人——野の人の死——樗牛、野の人とその友人たち
——「歌行燈」前後——「歌行燈」の成功

完

第四章

上司小剣——幸徳秋水の周邊の人々——秋水をめぐる女性たち

完

第五章

..... 四

小山内薫の青年時代——同人雑誌「七人」——伊井蓉峰——武林盤
雄と小山内薫——武林とキン子——小山内薫と女たち

第六章

..... 二四

坪内逍遙の演劇活動——左團次の演劇活動——左團次と小山内薫
——自由劇場の結成——「ボルクマン」の上演

第七章

..... 二五

島崎藤村の一族——「家」を書くまでの藤村——藤村の「ボルクマ

ン」評——「家」の連載が始まる

第八章

一五

「ホトトギス」の變遷——虚子と碧梧桐——虚子と「國民新聞」
——漱石とその弟子たち——「朝日」文藝欄の出現——「冷笑」と
「うづまき」

第九章

一六

遠藤清子の過去——泡鳴が清子を訪問する——泡鳴と清子の同棲生
活——泡鳴の女性關係

日本文壇史

——近代劇運動の發足

第一章

明治四十二年、古矢つぎの——伊良子清白——女性の崇拜者たちと夜雨——河井醉茗、小島烏水と夜雨——依田芳枝が夜雨と別れる

1

醉茗河井又平は明治四十年の四月、山縣悌三郎の出してゐた「文庫」の詩欄責任編輯者を辭し、詩草社といふ結社を作つて獨立し、六月からその機關誌として「詩人」を發行した。「文庫」以來の盟友である伊良子清白、横瀬夜雨、小島烏水たちは、醉茗のこの新しい詩の運動を支持したが、小島烏水は正金銀行の行員として横濱に在住し、また醫師の伊良子清白は山陰の各地を流浪して詩作に遠ざかつてゐたので、勤務を持たない横瀬夜雨が醉茗との連絡も多く、彼の仕事を助けることになつた。

河井醉茗は「文庫」に關係するかたはら、明治三十六年から羽仁吉一が主筆をしてゐた「電報新聞」の記者となり、三十九年まで勤めた。その當時から彼は、博文館出身の野口竹次郎が明治三十

八年から刊行してゐた投書雑誌「女子文壇」に詩の選者として關係してゐたが、その責任編輯者であつた徳田秋聲がやめたあと、乞はれてこの雑誌の編輯を引き受けることとなつた。「文庫」や「詩人」の編輯によつて生活することはできなかったから、彼は常に編輯者としての職業を別に持ち、それによつて詩人としての活動を支へてゐたのである。「文庫」は明治時代の出版界の異色ある人物であつた山縣悌三郎の經營するものであり、河井醉者は詩欄の責任者として専心することができた。しかし自分の手で雑誌「詩人」を出すとなると、改めて彼は、商業主義に基かぬ詩の雑誌を經營する困難にぶつからねばならなかつた。

京橋區大鋸町に社屋のある「女子文壇」は、全国各地に住む女性たちの投書雑誌として賣れ行きがよかつた。醉者の生活費はそこから得る月給で足りる筈であつた。しかし、彼の妻おはまは生計の立てかたが放漫で、「詩人」の經費に食ひ込みがちであつた。「詩人」の經費は毎月赤字であつた。河井醉者は、十一ヶ月間「詩人」を刊行したのち、遂に明治四十一年の春、これを廢刊せざるを得なくなつた。このとき河井醉者は數へ年三十五歳、横瀬夜雨三十一歳であつた。

茨城縣大寶村横根の豪農の次男として生れた夜雨横瀬虎壽は、幼時に患つた脊椎カリエスのため、腰から脚にかけての部分が萎縮して、異様な姿態をしてをり、ほとんど立ち歩きができない身であつた。さういふ身體を持ちながら、彼の女性を慕ふ氣持は強烈で、はじめは越後から來たおオ

といふ年上の女中に執着した。しかしお才は隣村にゐる同郷人の伊之吉といふ男と近づいて結婚した。その次に夜雨は従妹の琴子といふ少女を愛したが、母の波満は、彼の氣持を汲みながらも、結婚は琴子を不幸にするばかりでなく、夜雨の命を縮めると考へて、それに反對した。琴子はやがて他家へ嫁いで行つた。お才は結婚してから夜雨の家で働き、彼の世話をすることが誰よりも上手であつた。

夜雨は明治三十二年に詩集「夕月」を出し、三十八年に「花守」を出した。この詩集が出てから、夜雨の詩は世の注目を集めるやうになつた。幼児のやうな萎えた下半身に、大きな肩と顔がぶざまに載つてゐる夜雨の姿は、初めて見る人をぎよつとさせるほど奇怪なものであつた。しかし彼の書く詩、たとへば、

筑波の山の猿飛岩も

踏みただらかす足は萎^なえたれ

來よと言はばゐざりてだに

行きて君に縋^{すが}らんもの

わがくち
吾唇は燥けり

燥いて焦れんとすれど

露を刺に貫ける薔薇の花の

白きは人なる君に似たり

といふやうな詩句は、足萎えた夜雨を純粹な情感にあふれる不幸な詩人と思はせ、その詩にある女性賛仰の言葉は、女性の讀者たちの心を強くとらへた。

明治三十九年の春、古矢つぎのといふ東京に住む女性から夜雨のところに手紙が來た。その中には次のやうな言葉があつた。「私はお心のさびしいあなたをお慰めしたいと思ふばかりです。どうしてもお母さまがお許しにならない時は、私がそちらへ參つて、おうちに入れていただけないなら、大寶の沼のほとりに家を持ちます。そして一つ家の人となれなくとも、友として往き來し、心と心をつないで參るだけならば、御兩親をはじめ、御兄弟方もむつかしいことは仰しやるまいと思ひます。」

それが夜雨を動かした。夜雨はこの女性と二人で東京に住みたいといふ希望を持ち、河井醉茗に手紙を書いた。その中には次のやうな言葉があつた。

「一路の春風わが懷に入るの思ひなきにしもあらず、二十九年寂寥になれしわが身の果てに、はじめて人のやさしき心を見出してさすがに胸のをどり候。つぎの子は進んでこの廢人の身の杖となり、一生の寂しき伴侶たらんといふ、わがあら野に埋れて嘆けるをあはれみ、父母の庇護より離れて東京に出でしめんため、おのれも母のもとを去つて自活し、自らが營むさやかなる家に我を迎へて共に暮さんとする、かかる時頼みとするは君一人のみ」

それから間もなく、河井醉茗が、その頃まだ席のあつた「電報新聞」社へ行くと、その古矢つぎのが商賣女じみた身なりで應接間に彼を待つてゐた。そして彼女の差し出した夜雨の手紙には、何とかしてこの女性に新聞社の仕事を見つけてやつてほしい、と書いてあつた。しかし新聞は經營不振であり、夜雨の考へ方には性急にすぎるところが見えたので、醉茗はこの女性に手を貸してやる氣持になれなかつた。

古矢つぎのはそのあとで夜雨を大寶村へ訪ねて行つたのであつた。夜雨は母の波瀾と相談したが、母は女を家へ連れて來ることに反對した。夜雨はその頃、いくらか身體の自由が利いてゐたので、湖の上に舟を浮べ、そこでつぎのと語り合つた。逢つて話を聞くと、つぎのは大寶村からあまり遠くないところの出身で、その父や兄の名前も夜雨は知つてゐた。その上つぎのの姉は夜雨の親戚の家に嫁いでゐることも分つた。前の手紙につきぎのは過去に過失のある身だと書いてゐた。彼女は藝

者であつた。それは問はないとしても、つぎのは、自分の母には相當額の負債があつて、今は大變困つてゐる。自分はそのために關西へ行かねばならぬかも知れない。その前にお別れの意味で逢ひに來たのだが、その負債さへ何とか處理できるならばこの土地に留つて夜雨と暮したい、と言つた。横瀬家は負債があつて一度整理をしたのであるから、昔ながらの大きな家に住んでゐて、不動産があるとはいへ、その暮しは決して樂でなかつた。つぎのは、横瀬家のことを知つてゐて、その資産をあてにしてゐる様子が見えた。夜雨は不快になり、つぎのを歸らせたあとで、東京の醉茗に手紙を書いた。

「かれは去れり、恐らくは是永久の別なるべく候。母に遠ざからんがため、東京を去つて神戸の神學校に入らんとすとて、暇を乞ふため來れるにて候。電に似たるわが戀はかくて破れしに候。」

だが、それから暫くして、河井醉茗が「電報新聞」社を退職し、女子文壇社の責任編輯者となつたとき、また夜雨は、古矢つぎのに次のやうな手紙を持たせて京橋區大鋸町の社へよこした。

「女子文壇社ニ繼之子ガヤルヤウナ仕事ハナイデセウカ、書記ナドナラ充分出來ヨウト思フガ、ドウゾ野口氏ニキイテクレ玉へ、母ノ許ヲ離レテカラ、サスガニ困難ノ地ニ陥ッタライノデ、氣ニナッテナラナイカラ」

横瀬夜雨は、自分の妻になりたいと言つて來たこの女性を、一度はその不純な豫想に氣づいて突